戦後日本におけるポーランド研究

エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ（日本語訳　加藤 久子）

日本人がポーランドに関心を持つようになったのは、日本が世界との関係を築きつつ急速な近代化を遂げた 19 世紀後半のことである。超大国の植民地政策に対し、国民の注意を喚起するため、ポーランドの悲劇の歴史（三国分割と主権の喪失）が紹介された。このような観点から書かれたのが、東海散士の小説『佳人之奇遇』（1886 年）や、落合直文の長編詩『騎馬旅行』（1893 年）に所収された『波蘭懐古』である。落合は、ベルリンからポーランド領を横断し（1892 ～ 93 年）、ウラジオストクに至る福島安正少佐の単騎旅行に感銘を受けてこれを執筆した。福沢諭吉『西洋事情』（1866 ～ 70 年）もポーランドに言及している。20 世紀に入り、日本がポーランドの独立を認め、両国が公式に外交関係を締結した 1919 年以降、（主に英語からの）重訳でポーランド文学が出版されるようになった。これらの普及に貢献したのが、レイモントの『農夫』やジェロムスキの『灰』を翻訳した加藤朝鳥である。

ポーランド語を解する研究者が登場したのは 1950 年代であるが、両国の国交回復（1957 年）を経た 1960 年代に、その数はさらに増加する。ポーランド訪問が可能になったこと、また日本でのポーランド語講座の開講がこれを後押しした。ポーランド外務省の文書によれば、大学にポーランド語講座を開講することについての初めての協議は 1958 年 6 月 22 日、駐日ポーランド大使館のアレクサンデル・レイフェル一等書記官と早稲田大学学長および講座に関心を示した 2 人のロシア文学の教員の間で行われた[1]。同書記官は外務省宛に、日本側はこの企画に一部資金協力する可能性があるものの、日本には専門家がいないため、ポーランドから派遣する必要があると報告している。

> 私見では、早稲田大学のような有名大学にこのような拠点を開設することは、日本におけるポーランド文化の宣伝に極めて重要である。これにより、さまざまな分野でポーランド文化に関心を持つ人々の「先鋒隊」を作り出すことになるからである。本講座には、ポーランド文学やスラヴ文学の専門家のみならず、他学部の学生らも出席するだろう。

1959 年 2 月、レイフェルは北海道大学スラブ研究所を訪問する。教員・学生らのポーランドに対する強い関心を感じ取ると同時に、関連図書の不足を実感した同書記官は、研究所に対する資料面での協力や、北海道大学とワルシャワ大学間での学術交流について協議した[2]。しかしこの段階では、財政上の理由から交流は実現しなかった。

ポーランド語講座の件で、レイフェルは 1959 年 8 月、東京大学で講座を開講した木村

彰一のポーランド滞在は不可欠であると外務省に打電している[3]。そこでは、木村はロシア文学者であるが、「日本の学界における同氏の地位に鑑みれば、東京大学でポーランド語研究が発展する契機となろう」と説明された。言語学者でロシア文学者でもある木村彰一は日本のスラヴ学の祖である。戦前は東京外国語学校（現・東京外国語大学）に勤務し、戦後は北海道大学で教鞭を取った。1955 年に同大学法学部附属スラブ研究施設長に就任する。その 2 年後、東京大学に異動し、後にロシア文学科を創設した。1974 年の定年退官後は早稲田大学の教授を務めた。木村はレイフェルの勧めに従い、1961 年にポーランドに 1 年間留学したが、これが 1966 年以降、主にロシア文学を専門とする後期課程の学生ために開講したポーランド語講座へと結実した。この授業は東京外国語大学と東京大学で、1 週間ごとに交互に開講された[4]。こうして木村は、日本のポーランド語教育の基礎を築いたのである。吉上昭三、ヘンリク・リプシツとの共著で教科書『ポーランド語の入門』（1973 年）を執筆し、同氏を長として『白水社ポーランド語辞典』（1981 年）が完成した。また、シェンキェヴィチの『クオ・ワディス』（1972 年）の日本語訳を刊行した。

同書は、河野与一（『クオ・ヴァディス』1954 年）と梅田良忠（『クォ・ウァーディス』1964 年）によっても翻訳された。梅田は戦間期のほぼすべてをポーランドで過ごし、初のネイティブスピーカーの日本語講師としてワルシャワ大学（1926 ～ 1928 年）で、次いでポーランド・日本協会、東洋学学校（1930 ～ 1939 年）で教職に就いた。戦後は関西学院大学の教授に就任し、ポーランド及び中東欧の歴史について研究し、執筆、教育活動に従事した。また、ミツキェーヴィチ、スウォヴァツキ、ヴィェジンスキ、プルス、ドンブロフスカなどの作品を翻訳した。彼の働きかけにより、『世界名詩集大成』（平凡社）の第 15 巻として「北欧・東欧」（1960 年）が刊行され、コハノフスキ、ミツキェーヴィチ、スウォヴァツキ、クラシンスキ、ウイェイスキ、コノプニツカ、スウォムスキ、トゥヴィンらの作品が所収された。

梅田はポーランドをこよなく愛したが、戦後にポーランドを訪れることは叶わなかった。その愛情は、論文や翻訳、日本でのポーランド文化の普及、ポーランド訪問を望む日本人や在日ポーランド人に対する支援、ポーランド及び世界中のポーランド人との交流へと注がれた。彼の戦前の弟子で、後に高名な日本学者になったヴィェスワフ・コタンスキは、1957 年に初のポーランド人民共和国給費留学生として日本に赴いたが、京都の梅田邸で、言葉では言い尽くせないほどの心づくしの支援を受けたと回想した。

> 彼だけでなく家族全員が、客人を肉親のように遇し（.....）、あらゆる手助けをする心構えを持ち、日々の生活のことで（.....）隠し立てせず、また同時に日本の習慣や生活様式の基本を身につけるという点では断固として教育的であった。彼は根っからの日本人として、一旦自らが引き受けた道義的責任は最後まで一貫して引き受けるべきと考えていた。この時の梅田と彼の家族はまさにその言葉どおりであった。このようにして、日本に関する知見のさらなる深化が可能な環境を自らの弟子たちに与えた。誠実に教師の義務を果たすと

いう点で、これ以上の例はない[5]。

梅田の推薦により、1956 年のポーランド科学アカデミーのミツキェーヴィチ学会に出席するため、浅井金蔵がポーランドに渡航した。浅井は英語科を卒業して大阪で新聞記者をしていたが、ポーランドに関心を持ち、50 年代初頭に文芸分野の翻訳家になることを決意する[6]。ミツキェーヴィチに傾注しつつ、ポーランド文学のアンソロジーも翻訳したが、残念ながら彼の翻訳作品の多くは出版社を見付けることができず、刊行されることはなかった。時宜を得なかったということだが、彼が活動を始めた頃には、両国に外交関係がなかったこともおそらく影響している。

梅田と浅井は、1957 年に東京で開催された国際ペンクラブの第 29 回会議に参加した。ポーランド人参加者の 1 人であったアレクサンデル・ヤンタ＝ポウチンスキは、梅田とは戦前から親交があったが、以下のように述べている。

> 私は［詩人でエッセイストのカジミェシュ・］ヴィェジンスキと座っていた。我々のすぐ後ろにポーランド語を話す 2 人の日本の友人がいた。（.....）我らが日本人、梅田良忠と浅井金蔵はポーランドに滞在していた。（.....）2 人ともポーランドにほれ込んでいる。独特のアクセントでポーランド語を話すが、しかしそれは驚くほど見事で流暢である[7]。

これは、彼らの語学力に関する、おそらく最高の証言ではないだろうか？数年後の 1960 年代、日本にはポーランドで語学を学んだ最初の世代のポーランド語学者やポーランド文学者・翻訳家が登場する[8]。米川和夫、工藤幸雄、吉上昭三らである。ロシア文学者の米川は、戦後初めてのワルシャワ大学日本学科の日本語講師となった（1959 ～ 67 年）。ポーランドからの帰国後、1968 年に早稲田大学に初のポーランド語公開講座を開講したが、何よりアンジェイェフスキ、ゴンブローヴィチ、レイモント、ガウチンスキ、トゥヴィン、ルジェヴィチ、ブロニェフスキらの翻訳で知られる。工藤は仏文学や文学史を専攻し、通信社に勤めた後、1967 ～ 74 年にワルシャワ大学日本学科で日本語講師を務めた[9]。翻訳家としての業績は豊富で、ゴンブローヴィチ、ジンゲル（シンガー）、ムロジェク、ヴィトキェヴィチ、コンヴィツキ、ミウォシュ、シンボルスカの作品を翻訳した。長年、『パン・タデウシュ』（講談社、1999 年）の翻訳に取り組み、ブルーノ・シュルツ全集の翻訳によって、1999 年に権威ある読売文学賞を授与された。工藤は、リシャルト・カプシチンスキが 1957 年に新聞『青年の旗』の若き記者として来日し、イデオロギー的な障壁にもかかわらず、さまざまなテーマについて議論したことから、ポーランド語を学び、ポーランド文学を職業とすることを決意したことを後年認めている[10]。

吉上はロシア文学・ポーランド文学の専門家で、1981 ～ 83 年にワルシャワ大学の日本語講師を務め、シェンキェヴィチ、イヴァシュキェヴィチ、アンジェイェフスキなどの翻訳を手掛けた。1964 年に妻の内田莉莎子とともに初めてポーランドに滞在した。内田は

児童文学の翻訳家で、日本ではファンも多い。ルドヴィク・イェジ・ケルン作『おきなさいフェルディナンド』（1967 年）、マリア・コヴナツカ作『ぼくはネンディ（後に「ネンディのぼうけん」と改題）』（1968 年）他の翻訳で知られる。

吉上の発案と出資により、日本で最初の（そして今日に至るまで唯一の）ポーランド文学誌「ポロニカ：ポーランド文化の現在、過去と未来」（恒文社）が創刊され、1990 ～ 95 年に 5 号まで刊行された。ポーランドでも個展を開き、日本におけるポーランド美術の普及に功績のある芸術家、山本美智代がデザインを手掛けた。吉上は創刊号（1990 年）の序文において、雑誌の目的はポーランド文化の諸相を紹介し、論文や記録、ポーランド語からの翻訳を発表することであると記している。創刊号には、文学や映画、ピアニスト、文芸誌『ヒメラ』などに関する文章、ヴィトルド・ゴンブローヴィッチ『日記抄』やボグダン・ヴォイドフスキの翻訳、ポーランドの伝説やポーランド建国に関する論考などが掲載されている。第 2 号（1991 年）、第 3 号（1992 年）は演劇を特集しているが、文学や音楽に関する論文も多数寄せられている。第 4 号（1993 年）、第 5 号（1994 年）は、両国間での人物交流、両国での彼らの経験、両国関係への影響などが主に取り上げられた。吉上の仲介で、筆者とアンジェイ・T・ロメルの共著論文「第二次世界大戦と秘密諜報活動：ポーランドと日本の協力関係」（吉上昭三・松本明訳）も掲載された。これは我々の調査の最初の成果物で、この後、同論文の内容も含む両国関係を扱った書籍（初版 Bellona、1996 年；第 3 版ワルシャワ大学、2019 年）もポーランドで出版された[11]。しかし残念ながら、『ポロニカ』は 5 号で廃刊となった。

吉上の尽力により、1978 年に東京大学とワルシャワ大学の間での協力協定が署名に至ったのも重要な出来事であるが、実際の協力は既に 1974/75 年度から始まっていた。これはワルシャワ大学と日本の大学との初めての協力協定であった。これによって日本学科には年単位で（主に東京大学と北海道大学から）日本語の講師が派遣されるようになり、彼らは滞在中に自らの研究課題にも取り組んだ。最初に滞在したのは、スラヴ文学者でポーランド文学の翻訳家である森安達也である（1974 ～ 76 年）。この協定により両大学間での交換留学も始まった。吉上は両大学間のさらなる協力を終生見守り続けたが、コーディネータ役は沼野充義が引き継ぎ、その後は楯岡求美がこの役割を担っている。

このポーランド学のパイオニアたちと、彼らが 1960 年代後半に出版した翻訳作品により、日本におけるポーランド文学への関心は高まった。ポーランド文学を知り、ポーランド文化をポーランドや世界各地で学び、1980 年代以降に活動を始めた次世代の研究者を育んだのも、彼らとその作品である。その中から文学や文化研究、言語学などの優れた研究者や翻訳家が輩出され、スラヴ学者、ロシア文学者、比較文学者として活躍する人もいる。本稿で全員の名前を列挙し、その数多の作品に言及することはできないが、この時期を通じて活躍し、筆者が長年良く知る人物として関口時正、沼野充義、西成彦を挙げる。

関口は、ポーランド文学、文学理論、文化研究、比較文学、文学作品の翻訳が専門である。翻訳のほか、自らの評価する作家や、ポーランド文学・文化研究を通しての経験、

ポーランドやポーランド人、ポーランド語教育、文化間の諸問題などについて多数の論考がある[12]。2013 年には「ポーランド文学古典叢書」シリーズ（未知谷）の刊行が始まった。これは「ポーランド文化叢書」企画の 1 つとして、ポーランド広報文化センターの助成及びフォーラム・ポーランド組織委員会の後援の下、関口のイニシアティヴによって創刊されたものである。日本でのポーランド文化の振興を目的とし、2017 年までに 7 巻が刊行されている。関口の訳によるものは、コハノフスキの『挽歌』、ミツキェーヴィチ『バラードとロマンス』、ヴィトカツィ「小さなお屋敷で」「水鶏」「狂人と尼僧」「母」のほか、プルス『人形』がある。『人形』の翻訳により、関口は 2018 年に格式の高い 2 つの賞（読売文学賞及び日本翻訳大賞）を受賞した。

そのほか、本シリーズには、関口と赤尾光春が翻訳し、西成彦が編集したアン＝スキ、ゴンブローヴィチ『ディブック．ブルグント公女イヴォナ』がある。また、ミツキェーヴィチ『ソネット』は、19 世紀ポーランド文学の専門家で、レムにも関心を持つ久山宏一が翻訳している。久山はポーランド映画に関する知識に優れ、その普及にも努めてきた。

沼野はスラヴ文学者としてロシア文学ポーランド文学に通じ、比較文学者であり文芸評論家でもあるが、ポーランド文学の翻訳も数多く手がけてきた。東京での沼野との会合の際に、次のような発言があった。

> 私の世代にとってはですね、やっぱりまずポーランドニューウェイヴと言われまして、映画がありましたね。ワイダ、ポランスキ、カヴァレロヴィチ、そういった映画も見ていましたし、それから日本ではやはり特に恒文社の『東欧文学全集』という翻訳シリーズの影響が――これは非常に広範な大衆的な読者に対してではないですけど――文学に興味のある一部の人たちに非常に大きな影響があったと思います。部数も少なくても、それで丁度、私の先生に当たる世代の工藤さん、吉上さん、米川さん、そういった人たちがポーランドの、20 世紀の最先端ともいえるような優れた文学を発見していたわけですね、その頃。つまり、ゴンブローヴィチもシュルツも初めて紹介されるようになった。それからポーランドのニューウェイヴ映画と並行して現代の小説、例えばアンジェイェフスキとかそういったものも紹介されるようになった。ということでポーランドに関しては比較的に、私たちは文化、芸術、映画に対してやっぱり興味を非常に強く持っていた世代だと思います。

沼野の関心を引いているのは主にポーランドの現代文学で、そのなかにはノーベル文学賞受賞者のミウォシュやシンボルスカの作品から SF 小説まで含まれる。彼はスタニスワフ・レムを極めて重視しており、既に 80 年代にレムのデビュー作『金星応答なし』をポーランド語から直接訳出し、出版している。

沼野のレムへの関心を契機として、日本で『スタニスワフ・レム・コレクション』全 6 巻が出版された。この翻訳には、関口と久山のほか、芝田文乃、加藤有子、長谷見一雄、井上暁子など、主要な翻訳家や文学者が参加した。沼野は、関口とともに訳者を集め、こ

れによってチェスワフ・ミウォシュの作品が日本で知られるようになった。2011 年に初めてのアンソロジー『チェスワフ・ミウォシュ詩集』（成文社）が出版された。それに先立ち 2006 年に出版された『ポーランド文学史』（未知谷）の翻訳は、森安達也、長谷見一雄、西成彦も参加しているが、この翻訳は吉上がかなり以前に始めたものである。沼野は 2018 年に、現代ポーランド文学の翻訳分野での顕著な成果に対し、ベネディクト・ポラク賞を授与された。

西は比較文学者、またポーランド文学者として学際的な研究に従事している。文芸評論家、翻訳家としても活躍し、ゴンブローヴィチの専門家として多数の論考や翻訳がある。また、イディッシュ語文学の歴史にも取り組んでいる。

日本では、文学以外にも歴史学、政治学、経済学、法学などの分野にポーランドを専門とする研究がある。全てを列挙することはできないが、最初の通史が書かれたのは 1980 年代で、山本俊朗・井内敏夫『ポーランド民族の歴史』がそれにあたる。2 人はそれぞれポーランド近代史と中世史の専門家である。歴史研究者としては、現代史および比較政治学の専門家である伊東孝之、『ポーランド人と日露戦争』や『ヨーロッパにおけるポーランド人 ―19 世紀後半～ 20 世紀初頭』の阪東宏、ポーランドとヨーロッパの啓蒙思想を扱った中山昭吉、ポーランド史と日ポ関係、国際文化研究を専門とする柴理子、19 世紀史およびユダヤ人問題が専門の山田朋子、近代史が専門でドゥモフスキやポーランド＝ユダヤ関係を研究する宮崎悠、現代史およびカトリック教会を専門とする加藤久子などがいる。

「ポーランド文化叢書」の枠組みで 2013 年に歴史叢書も刊行された。ポーランド史において最も重要な資料が訳出され、注釈付きで刊行されている。当初、東洋書店から出版された際には「ポーランド史史料叢書」と名付けられていた。同叢書の出版委員会には、18 世紀の歴史を専門とする白木太一、近世・近代史の小山哲、現代史の吉岡潤が名を連ね、白木『1791 年 5 月 3 日憲法』、小山『ワルシャワ連盟協約（1573 年）』、吉岡『戦うポーランド：第二次世界大戦とポーランド』、加藤『教皇ヨハネ・パウロ 2 世のことば：1979 年、初めての祖国巡礼』の 4 巻が刊行された。2015 年以降は「ポーランド史叢書」と改称され、群像社から出版されている。ルテニア研究の福嶋千穂がブレスト教会合同（1595 ～ 96 年）について執筆し、白木の「5 月 3 日憲法」の新版を挟み、梶さやかが「ドンブロフスキのマズレク」を扱った本を出版した。

その他の分野では、経済学及びポーランド地域研究の田口雅弘、経済史の藤井和夫、松家仁、ブロニスワフ・ピウスツキや彼のアイヌ研究を専門とする澤田和彦、井上紘一、1989 年以後のポーランドの法制度を専門とする小森田秋夫がいる。

大学におけるポーランド講座

日本でポーランドの文化や言語を学べる場所は大学や各種学校など複数あるが、ポーランド語専攻があるのは東京外国語大学だけである。同大学のポーランド語専攻は、ポーラ

ンドの体制転換を受けて 1991 年に創設された[14]。これは、19 世紀半ばに起源を持つ同大学の伝統を受け継ぐものである。東京外国語学校には日本初のロシア語学科が設置され、1922 年には八杉貞利の発案によりポーランド語の授業が始まり人気を博した[15]。残念ながら、1923 年の関東大震災による校舎の焼失により、ポーランド語の授業は廃止された。

現在の東京外国語大学は国際文化研究や学際研究の拠点として、27 の言語とそれに関連する文化を扱う講座が設置されており、ポーランド語もその 1 つである。また、50 もの言語の授業が開講されている。1995 年にはロシヤ・東欧語学科がロシア・東欧課程に改組され、ポーランド専攻が設置された。その創始者で、最初の教員となったのは、言語学者としてポーランド語・スラヴ語を専門とする石井哲士朗である。その後、文学者・文化研究者である関口時正と、歴史学者でポーランドのユダヤ文化を研究する小原雅俊が加わった。ポーランドに関する教育はこうして、言語学、文化研究、社会科学の 3 分野において行われてきた。専攻長は当初は石井が、その後 2013 年までは関口が務めた。この頃、大学の改組により言語文化学部と国際社会学部という 2 つの新しい学部が設立した。ポーランドの文化や言語に関する教育研究は両学部で行われているが、ポーランド語専攻としての同一性は維持されている。現在の専攻長は、言語学者でスラヴ語・ポーランド語を専門とし、「クレスィ（東部国境地帯）のポーランド語」を研究する森田耕司が務めている。

両学部においては、ポーランド語以外にも、さまざまな専門科目が開講されている。ポーランドの言語・文化に関する授業は学士課程の 4 年間をかけて行われ、専門科目としては、社会科学や地域研究分野の授業が開講されている。ポーランド語についてはポーランド人が指導しており、専攻が創設されて以来、レナータ・ソヴィンスカ＝三井とグラジナ石川がこれに関わってきた。また、久山宏一も授業を担当している。2007 年には、同大学で初めて「ポーランド語能力国家検定」が実施された。ポーランドに関心を持つ学生のサークル活動も行われており、学生新聞「チェシチ」を発行している[16]。また彼らは毎年、大学祭に参加し、ポーランドの紹介を行っている。

ポーランドの文学や言語については、東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室でも学ぶことができる[17]。その歴史は、木村彰一の下でロシア語ロシア文学専修課程がスタートした 1972 年に遡る。1994 年に同課程はスラヴ語スラヴ文学専修課程と改称され、教員として沼野充義が着任し、ポーランドの言語と文化に関する授業を担当するようになった。またポーランドからゲストスピーカーを招き、講義やセミナーが開かれている。

ポーランドやその他の旧共産圏の国々に関する研究は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターにおいても行われている。同センターの歴史は 1953 年に始まり、1955 年にはスラブ研究所として設置された[18]。同センターでは、言語学者でスラヴ語学を専門とする野町素己がポーランド語を教えている。野町は 2003 ～ 2005 年にワルシャワ大学日本学科で日本語を教えた。センターは、ポーランドはもとより世界中から研究者を招聘し、共同研究を行い、会議を開催している。2013 年には北海道ポーランド文化協会とともに、

シンポジウム「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事」を主催した（後援：駐日ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター）[19]。これは同年、白老のアイヌ民族博物館で、アイヌの言語・文化の調査を行った卓越した民族誌家ブロニスワフ・ピウスツキの胸像の除幕式が行われたのを機に開催されたものである。

第二外国語としてのポーランド語の授業は、城西国際大学（主に国際人文学部国際交流学科）などで行われており、柴理子とグラジナ石川が教えている。ポーランド文化については、ヨーロッパや異文化理解をテーマにした授業で学ぶことができる。また、城西大学には中欧研究所が設置されており、ポーランドを含む、中央ヨーロッパ地域に関する研究が行われている[20]。2014 ～ 17 年にはポーランド語を学ぶ学生が、ポーランドで短期研修を行う「ポーランド短期国際交流プログラム」が提供されたが、これは柴理子が企画し、日本学生支援機構の支援を得たものである。

ポーランド語教育

ポーランド語は、その他の大学においても学ぶことができる。早稲田大学では長年、ポーランド語の授業が開講されており、また京都産業大学においても、1962 ～ 65 年にポーランドに留学した歴史学者の中山昭吉により、1968 年にポーランド語の授業が開講された。2010 年には、在大阪ポーランド共和国名誉総領事である高島和子とポーランド大使館の協力により、京都大学文学部でポーランド語の授業が開講した[21]。これは、1996 年に設置された文学部スラブ語学スラブ文学専修の教員から提案されたものだった。2013 年まで、ポーランド語の授業は、神戸市外国語大学ロシア学科の森田耕司によって行われていたが、森田は神戸市外大においてもポーランド語の授業を開講していた。ポーランド語は、創価大学や桜美林大学などの私立大学においても学ぶことができるほか、大学外でも開講されている。朝日カルチャーセンターや DILA 国際語学アカデミーにもポーランド語講座があるが、後者は企業等を対象に要望に応じて開講している。また、外務省では外交官に対し、ポーランド語教育が行われている。かつてはマヤコフスキー学院にも講座が設けられていた。

日本におけるポーランド語の普及に間違いなく重要な役割を果たしてきたのは、2019 年 1 月に 22 回目の開催となったポーランド語スピーチコンテストである[22]。かつてはポーランド大使館が、その後ポーランド広報文化センターが主催している。優勝賞品はポーランドへの航空券で、1 ～ 3 位入賞者には、ポーランドのいずれかの大学でポーランド語の夏期講習に参加できるポーランド共和国学術・高等教育省奨学金が授与される。

フォーラム・ポーランド

ポーランドに関する専門知識の普及に重要な役割を果たしているのがフォーラム・ポーランドである。ポーランドの専門家であり愛好者でもある関口時正と田口雅弘によって 2005 年に設立され、研究者、ビジネスマン、政治家、ポロニアなど、ポーランドに関す

るさまざまな人々を結びつけることを目的としている[23]。フォーラムは「日本国内に、ポーランドに関する／ポーランドからの情報を伝えるための効率的なシステム」を構築し、「学術研究、文化、ビジネス、あるいは個人的にポーランドとつながりがある人々が出会い、分野を超えて議論し、情報や経験を共有する可能性」を生み出そうとしている。これは、日本ポーランド協会が廃止された後の空白を埋める、両国の留学経験者（元奨学生）のクラブの役割も果たす開かれたフォーラムとなっている。「特定非営利活動法人フォーラム・ポーランド組織委員会」が公式に組織され、フォーラムの活動に関する提案や監査を行っている。委員会には、社会的に活躍し、ポーランドとの交流に豊富な実績を持つ十数人の委員が参加し、代表は関口、副代表は田口が務めている。

2005 年以降、東京において、多分野の人々が参加する年次大会が開かれ、広義のポーランド文化・芸術、社会科学に関わるテーマが取り上げられている。当初はポーランド大使館が、現在はポーランド広報文化センターが後援している。2017 年に開催された第 13 回会議においては、戦間期におけるポーランド・アヴァンギャルドについて議論された。過去に取り上げられたテーマとしては、「ヨーロッパへの回帰」「ポルスコシチ（ポーランド的なるもの）」「ワルシャワ」「ポーランドのカトリック」「ショパン」「『連帯』運動とその遺産」「ポーランドとその隣人たち」「ポロネーズをめぐって」「ポーランドの今日・明日」「アンジェイ・ワイダ」「キリスト教ヨーロッパにおけるポーランドの 1050 年」などがある。また会議後に会議録を発行している。フォーラムはそのほかにも、ポーランドに関する知識を「専門的に」普及するための企画を行っている。先述の「ポーランド文化叢書」は、フォーラムと関口による極めて重要な事業であり、文学と歴史の叢書以外にも、楽譜にポーランドの歌詞、カタカナ表記の発音、日本語の翻訳を付記した「ポーランド声楽曲選集」（ハンナ）を刊行している。同シリーズには、『12 のコレンダ』（2015 年）、『カルウォーヴィチ歌曲集』（2016 年 ）などがあり、これらはピアニストで音楽学者の小早川朗子や、音楽学者でカロル・シマノフスキの専門家である重川真紀とともに関口が編集したものである。

日本でのポーランドに関する知識の深化やポーランド文化の普及には、多くの団体が尽力してきた。日本ポーランド協会関西センター（代表：藤井和夫）、北海道ポーランド文化協会、日ポ・サロン、日本ショパン協会、日本・ポーランド文化交流協会などである。東京のポーランド広報文化センターも重要な役割を果たしている。専門家であるポーランド文化の研究者とアマチュアの愛好家、これら全ての人々によって、ポーランドは日本においてプレゼンスを獲得してきたし、さらに大きな関心を喚起している。日本人のポーランドに関する知識は、もはやショパンやコペルニクス、キュリー夫人しか知らないという水準には留まらない。

注

1. Departament Prasy i Informacji (DPI), *Japonia 551*, 1958, zespół (z.) 21, wiązka (w.) 51, teczka (t.) 726, Archiwum Ministerstwa Spraw Zagranicznych (AMSZ), Warszawa.
2. DPI, *Japonia 5637*, 1958-1961, z. 21, t. 728, w. 51, AMSZ.
3. DPI, *Japonia 2654*, 1959, z. 21, t. 725, w. 51, AMSZ.
4. Tokimasa Sekiguchi, „Od japońskiego Schultza do polskiego Parnickiego – w okolicach roku 1974", in Władysław Miodunka, Anna Seretny, eds. *Język, literatura i kultura polska w świecie, Biblioteka* „LingVariów" – Seria Glottodydaktyka, t. 13 (2016), p. 34.
5. Wiesław Kotański, „Ryōchu Stanisław Umeda - szkic biograficzny", *Przegląd Orientalistyczny*, no. 3 (1962), p. 286.
6. Kuyama Kōichi, „Ryszard Kapuściński w Japonii – lata 1956-57 w dziejach polsko-japońskich kontaktów kulturalnych", in Tokimasa Sekiguchi, ed. *Spotkania polonistyk trzech krajów – Chiny, Korea, Japonia – Rocznik 2009* (Tokio: Katedra Kultury Polskiej TUFS, 2010), pp. 122-124.
7. Ibidem, pp. 125-126.
8. 沼野充義「日本人 のポーランド文学との出会い」『ショパンポーランド・日本展：日本・ポーランド国交樹立 80 周年および国際ショパン年記念事業』日本・ポーランド国交樹立 80 周年および国際ショパン年記念展実行委員会、1999 年、206-213 頁。
9. 工藤幸雄『ワルシャワの七年』新潮社、1977 年。
10. Kuyama Kōichi, *Ryszard Kapuściński*…, p. 128.
11. 日本語訳は、柴理子訳『日本・ポーランド関係史』彩流社 2009 年。
12. 関口時正『ポーランドと他者：文化・レトリック・地図』みすず書房、2014 年；Tokimasa Sekiguchi, *Eseje nie całkiem polskie* (Kraków: Universitas, 2016).
13. シリーズ全 13 巻が 1966 ～ 69 年に刊行されたが、ポーランド文学としては、第 6 巻（1967 年）のシュルツ「肉桂色の店」「クレプシドラ・サナトリウム」、ゴンブローヴィチ「コスモス」（以上、工藤訳）、第 7 巻（1966 年）のアンジェイェフスキ「聖週間」、ポスムイシ「パサジェルカ＜女船客＞」、グロホヴィヤクの詩（以上、吉上他訳）、第 8 巻（1967 年）のイヴァシュキェヴィチの作品数点（福岡星児訳）がある。
14. 関口時正「日本のポーランド語・ポーランド文化教育」『ショパンポーランド・日本展』1999 年、214-217 頁；Renata Mitsui, „Krótki przewodnik po Tokijskim Uniwersytecie Studiów Międzynarodowych (TUFS)", *Polonia Japonica* (19 VI 2016), http://poloniajaponica.jp/zycie-w-japonii/item/1428-krotki-przewodnik-po-tokijskim-uniwersytecie-studiow-miedzynarodowych-tufs 2018 年 3 月 15 日閲覧。
15. 日本ポーランド協会会報誌『ヴィスワ』11 号、1980 年、6-7 頁。
16. https://www.facebook.com/gazetka.czesc 2018 年 3 月 12 日閲覧。
17. http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slav/ 2018 年 3 月 28 日閲覧。
18. http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/index11.html 2018 年 3 月 8 日閲覧。
19. http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/index.php?jname=381 2018 年 3 月 10 日閲覧。
20. http://www.josai.ac.jp/jices/ejces_j/about/index.html 2018 年 3 月 26 日閲覧。
21. http://www.forumpoland.org/pol2010.pdf 2018 年 4 月 24 日閲覧；高島さんから聞き取り。
22. http://pl.instytut-polski.org/event-archives/6919/ 2018 年 3 月 20 日閲覧。
23. http://www.forumpoland.org/aboutus.html 2018 年 3 月 20 日閲覧 ; Renata Mitsui, „O działalności NPO Forum Polska – rozmowa z profesorem Tokimasą Sekiguchim", *Polonia Japonica* (8 XII 2014), http://poloniajaponica.jp/wywiady/item/1234-o-dzialalnosci-npo-forum-polska-rozmowa-z-profesorem-tokimasa-sekiguchim 2018 年 3 月 20 日閲覧。

Powojenne studia nad Polską w Japonii

Ewa Pałasz-Rutkowska

Pierwsi specjaliści znający język polski pojawili się w latach 50. XX w., a zaczęło ich przybywać w latach 60., po wznowieniu stosunków oficjalnych między Polską a Japonią (1957). Fundamenty pod polonistykę w Japonii stworzył Kimura Shōichi, lingwista i rusycysta, ojciec slawistyki japońskiej. Był współautorem podręcznika i słownika do języka polskiego, przetłumaczył na język japoński *Quo vadis* Henryka Sienkiewicza (1972). Do tłumaczy *Quo vadis* należy też m.in. Umeda Ryōchū (1964), który niemal cały okres międzywojenny spędził w Polsce. Jako pierwszy native speaker uczył języka japońskiego na Uniwersytecie Warszawskim, w Towarzystwie Polsko-Japońskim, w Szkole Wschodoznawczej. Po wojnie badał dzieje Polski i Europy Środkowo-Wschodniej, a dzięki jego inicjatywie w ramach serii *Sekai meishishū taisei* (Zbiór słynnej poezji świata; Heibonsha), w 1960 roku wydano tom *Hokuō, Tōō* (Europa Północna, Europa Wschodnia), w którym zamieszczono tłumaczenia utworów Kochanowskiego, Mickiewicza, Słowackiego, Krasińskiego i innych.

W latach 60. w Japonii pojawiło się pierwsze pokolenie polonistów, badaczy i tłumaczy literatury polskiej, którzy język poznali w Polsce. Należeli do nich: Yonekawa Kazuo, Kudō Yukio, Yoshigami Shōzō. Wszyscy trzej mają bogaty dorobek translatorski – dzięki nim Japończycy poznali m.in. utwory Mickiewicza, Sienkiewicza, Reymonta, Singera, Witkiewicza, Schulza, Andrzejewskiego, Gombrowicza, Mrożka. Yonekawa stworzył na Uniwersytecie Waseda pierwszy publiczny kurs języka polskiego (1968). Z inicjatywy Yoshigamiego powstało w Japonii pierwsze i jedyne pismo polonistyczne „Polonica. Pōrando bunka no genzai, kako to mirai" (Stan obecny, przeszłość i przyszłość kultury polskiej; Kōbunsha; 1990-1995).

To dzięki tym „pionierom - polonistom" i ich świetnym przekładom bardzo wzrosło zainteresowanie literaturą polską w Japonii w drugiej połowie lat 60. To pierwsze pokolenie polonistów wychowało następne, działające od lat 80., które wiedzę o polskiej literaturze, polskiej kulturze zdobywało i w Polsce, i na świecie. Jest wśród nich wielu wybitnych badaczy – literaturoznawców, kulturoznawców, krytyków literackich, językoznawców, flimoznawców oraz tłumaczy. Poza nimi Polskę propagują w Japonii historycy, politolodzy, ekonomiści, specjaliści w zakresie prawa. W ramach projektu *Biblioteka kultury polskiej w języku japońskim* publikują tłumaczenia literatury polskiej, ważnych dokumentów źródłowych, a także pieśni. Dzięki nim wszystkim Polska i jej kultura jest nie tylko obecna w Japonii, ale od lat budzi zainteresowanie.